

課題探究実践セミナー 「ラジオについて考えよう／ラジオ・ドキュメンタリーをつくろう」(人文学部人間文化学科2015年度開講)の記録

■ 川本 真浩 (高知大学人文学部)

■ 西尾 美穂 (高知大学人文学部)

はじめに

本稿は2015年度に人文学部人間文化学科で開講した初年次科目「課題探究実践セミナー」の一クラスである「ラジオについて考えよう／ラジオ・ドキュメンタリーをつくろう」の実践記録である。

このクラスにかかる実施基本事項は次のとおりである。

- ・副題：ラジオについて考えよう／ラジオ・ドキュメンタリーをつくろう
- ・時間割と教室：水曜2限 共通教育棟320番教室 ただし、学外から招聘したゲスト講師の日程上の都合と授業内容の関係により、6月17日(水)は3、4、5限に共通教育棟多目的室において開講した。
- ・担当：川本真浩・西尾美穂 ただし、後述のとおり3名のゲスト講師を学外から招いた。
- ・定員：20名 なお、履修登録締切時の受講希望者数が23名であることをたまたま抽選実施前に担当教員(川本)が把握し、定員再検討の末、今年度については23名の受講者に対応すべく授業計画を変更できるメドがついたため、希望者全員を受講可とした。

また開講までに、ICレコーダ4台を用意するとともに、学外からゲスト講師を招聘する準備も進めた。

後者については、2015年1月から5月にかけて、テーマに適した講師陣の人選と出講依頼をおこない、出講承諾後は、受け入れ事務手続きと並行して、授業概要とこちらの意向を各講師に伝え、講義内容について主にメールで(県内の講師については直接に会って)打ち合わせた。

授業実施内容

2015年4月から7月にかけて開講した授業の実施状況は以下のとおりである。

第1回(4月15日)「オリエンテーション」

- ・受講者票(実家のある自治体名を把握する→授業でのグループ編成のために使用)を配布し、その場で記入させて回収した。
- ・教員及び受講者がそれぞれ自己紹介した(出身地、これまでのラジオ体験、そのほかの部活経験や趣味など(放送部経験者による経験談を含む))
- ・①出身地(高知県内9名; 県外14名)②高校放送部出身(5名)であるかどうか③性別(男4名; 女19名)で偏りが生じないように、教員が受講者23名を4つのグループに分けた(6名×3班+5名×1班)。
- ・授業全体の概要を説明し、受講の前提となる「心がまえ」を示した。

ラジオというメディアにかかる意識（ラジオを肯定／否定するというのではなく、思考／議論の対象とすること）

グループワークという共同作業にとりくむ、そして知識を得るための基本的手法を修得するための「心がまえ」

- ・授業前半の課題である「全国各地（高知を除く）のコミュニティ・ラジオ（ＣＲ）を題材としたグループリサーチと報告」について詳細を説明した。
- ・学外から招聘するゲスト講師（３名）を紹介し、事前学習すべき事項を指示した。
- ・グループごとに分かれて作業を開始させた。
- グループ名の決定、作業の進め方、分担など。

《課題》「コミュニティ・ラジオ（ＣＲ）について、調査・報告する」の概要は次のとおりである。

- ・ＣＲ局（高知を除く）をとりあげて調査する。
 - ・いくつとりあげる、という指定はしないが、できれば複数とりあげる。一つの局を取りあげて深く掘り下げるにしても「他のＣＲ局を比較する視点」は必須である。
 - ・報告内容には次の４点を盛り込む。
- ①事業体（ＣＲ局運営主体）に関する基本情報・設立までの経緯・開局から現在までの状況（…事実）
 - ②放送エリアの概要と地域的特色（…事実といくらかの考察）
 - ③主な自主制作番組とその特徴（…事実と考察）
 - ④地域ないし聴取者とのつながりかた（…いくらかの事実と考察）
- ※比較の視座、多角的な視点…ＣＲ局の公式ＨＰ（基本情報）や広報などから読み取れることと、そこには現れない「実態」や「課題」をさぐり、考え、議論すること。

・発表（報告）方法

- ①必ずハンドアウトを配布する
- ②プレゼンテーションの手法についてはパワーポイント、模造紙、スケッチブック、図像提示など、各グループの創意工夫に任せる。発表時間は１グ

ループあたり10分間。

※調査に着手する際の手がかりとなるデータを得られるウェブサイトを紹介した。

総務省 HP にある「放送ネットワークの強靱化に関する検討会（第４回）会議資料」

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/kyou-jinka/02ryutsu09_03000127.html

日本コミュニティ放送協会 <http://www.jcba.jp/>

そのほか、各ＣＲ局が運営するＳＮＳ等を活用できる旨、説明した。

第２回（４月２２日）「ラジオについて、調べる／考える／語る」（１）

- ・ＣＲに関するグループリサーチ：グループ作業を進めさせた。
- ・教員が各グループをまわって、作業の様子を確認し、適宜助言を与えた。
- ・作業内容をＡ３紙（２枚）にフリーハンドで書き込ませ、授業終了時に提出させた。
- ・ＣＲや学外から招聘するゲスト講師に関わる参考図書を提示した（ＫＵＬＡＳも併用）。

第３回（５月７日）「ラジオについて、調べる／考える／語る」（２）

- ・ＣＲに関するグループリサーチ：グループ作業を進めさせた。
- ・教員が各グループをまわって、作業の様子を確認し、適宜助言を与えた。
- ・授業の終盤に１グループあたり２～３分をわりあてて、①進捗状況②今後の作業にむけた課題について、口頭報告させた。他グループの報告をきいて質問、意見などを出すよう、指示した（各グループの報告に対して、数人の学生から発言があった）。

第４回（５月１３日）「ラジオについて、調べる／考える／語る」（３）

- ・ＣＲに関するグループリサーチ：グループ作業を進めさせた。

- ・教員が各グループをまわって、作業の様子を確認し、適宜助言を与えた。
- ・学外から招聘するゲスト講師の一人である松木亮氏（エフエム高知・アナウンサー）から依頼されたアンケートを配布し、その場で記入させて、回収した。

第5回（5月20日）「グループ発表／相互論評」

- ・各グループ10分間の割り当てで、調査内容を発表させた。プレゼンテーションに際しては、ハンドアウトを作成させて、他の受講者に配布させた。
- ※プレゼンテーション方法は、パワーポイント使用が3グループ、スケッチブック使用が1グループであった。

《発表でとりあげられたCR局》

- ①FMわっぴ〜、FM石垣サンサンラジオ
 - ②知多メディアスエフエム、FMゆめウェーブ、FMからつ
 - ③FMちゅーピー、FMラヂオバリバリ、FMがいの、FMBAN-BANラジオ
 - ④岡山シティエフエムRadioMOMO、いわきFM
- ・学外から招聘するゲスト講師の一人である千野秀和氏（NHK高知放送局・アナウンサー）が、今回の授業を参観し、次回授業のための事前学習について指示された。
 - ・授業前半についてまとめるレポート課題を次のとおり提示・指示した。

《課題》「CR調査に関するレポート」を受講者各人が作成し、提出する。

- (1)「コミュニティ・ラジオ」について考えたこと／その展望と課題（1200〜1400字）
- (2) ①グループリサーチの作業概要 ②そのなかで自分が果たした役割 ③グループワークに関する成果と反省（①〜③をあわせて600〜800字）

体裁は、A4用紙を縦に置いて横書き、表紙は付けない、ワープロソフトを用いてよいが氏名は必ず手書き（署名）、とする。提出締切は6月10日（水）授業時

（前日までに川本研究室に持参してもよい。ただし手渡しに限る）。

第6回（5月27日）「ラジオの可能性」

標題のテーマについて、千野秀和氏（NHK高知放送局・アナウンサー）による講義及び質疑応答がおこなわれた。

《講義の概要》NHKラジオ放送の概要；ラジオの特性；ラジオとインターネット；「防災ラジオドラマ」

「ラジオ（番組）」に関する全般的な解説から、とくに①NHKネットラジオ「らじる★らじる」の開発②「防災コンテスト」（主催：国立研究開発法人防災科学技術研究所）審査員③防災ラジオドラマはじめ「特番」制作及び被災地報道、に関わってきた講師自身の経験談などに話が及ぶなど、講義内容は多岐にわたった。

なお、講義後の質疑応答は15分間ほどを予定していたが、講義時間がやや（10分ほど）延びたことに加えて、受講者からの質問も多くあり、授業時間を15分程度超過した。

第7回（6月10日）「高知における地方FMラジオ局」

標題のテーマについて、松木亮氏（エフエム高知・アナウンサー）による講義及び質疑応答がおこなわれた。

《講義の概要》自己紹介；エフエム高知の概要；日常業務とりわけ番組制作とその他の業務の関わりなど

「自分史」的エピソードからはじまってJFN加盟局としてのエフエム高知の事業活動の経緯と現状まで、率直かつわかりやすく話された。質疑応答における受講者とのやりとりにも具体的な説明を交えた丁寧な説明があった。

なお、授業に関わる次の事項について、授業終了時に受講者に指示した。

- ・「CR調査に関するレポート」提出締切
- ・次回授業の事前学習として、「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」ことについて、受講者各自で情報収集し、考えることを指示した。

第8、9、10回（6月17日）「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」（1～3）

標記3回分の授業は、通常とは異なる3、4、5限に、共通教育棟1号館多目的室で実施した。なお、3、4限には高橋俊教授（人文学部）と本学の学生サークル「放送研究会JAKKU」メンバー学生（2名）が授業参観した。

まず、標題のテーマについて、山登義明氏（元NHK／NHKエンタープライズ、TV番組プロデューサー）による講義及び質疑応答がおこなわれた。

《講義の概要》自己紹介及びこれまでの制作番組（NHKにて放送）の紹介と制作に関する解説：ドキュメンタリー番組制作の手順（企画／取材／編集）とその重要点について、他大学での映像ドキュメンタリー制作授業の実例紹介なども交えた説明

1970年のNHK入社以来、著名なドキュメンタリー番組を数多く手がけてきた経験に裏づけられた講義は、短時間では盛り込みきれない重厚な内容であった。

山登先生の講義及び質疑応答の後、授業後半は以下のように授業に進めた。

- ・学期初めと同様の方針でもって新たにグループ編成をおこない、その新グループ（4つ）に分かれて、「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」グループワークに着手した。その間、山登先生が各グループをまわって助言をおこなった。
- ・ドキュメンタリー制作要領と今後の日程について以下のように説明した（KULASへも掲出した）。

（1）音声コンテンツの長さは5～8分とする。

※なお、授業後に3～5分のほうが適切であろうという山登先生からの見直し提案もあり、再検討の末、そのように変更することにした（第11回授業にて告知）。

（2）県域ラジオ（エフエム高知など）またはコミュニティ・ラジオ（朝倉キャンパスを中心とする高知市西部及びいの町南東部を聴取エリアとする仮想CR）でオンエアすることを想定して制作する。

（3）ドキュメンタリーの主題／テーマ／トピックは基本的に自由である。ただし上記（1）（2）の条件

のほか、制作時間、作業内容、実際にオンエア可能なクオリティを保持することなど、さまざまな要件や観点をも考慮に入れて決めること。

（4）第13回授業（7月8日）にドキュメンタリーの内容（概要）を口頭報告し、相互コメントする（ドキュメンタリーの形を作り上げる上での疑問点、不足点、留意点などについて意見を出し合うことを意図している）。

（5）第15回授業（7月29日）に完成品を公開する。

第11回（6月24日）「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」（4）

・音声編集ソフトウェア Audacity の基本的な操作方法について、大学公認の学生サークルである放送研究会JAKKUのメンバー（和根崎友梨子・人間文化学科3回生）が解説したうえで、担当教員が受講者の実習作業を補助したり補足説明したりした。受講者は必携パソコンを持参し、実際に操作をおこないつつ、操作方法を習得した。

・ドキュメンタリー制作のためのグループワーク

制作要領の追加と一部修正をおこない、次の3点を示した。

- ①各グループでディレクター（MD）及びアシスタント・ディレクター（AD）を各1名きめること。
- ②ICレコーダの貸し出し（各グループに1台）とその管理についての諸注意。
- ③制作番組の長さを3～5分に変更すること。

第12回（7月1日）「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」（5）

・ドキュメンタリー制作のためのグループワーク：グループ作業を進めさせた。

・教員が各グループをまわって、作業の様子を確認し、適宜助言を与えた。

・山登先生から送られてきたペーパー「ラジオ番組の作り方（実践篇）」を配布した。

第13回（7月8日）「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」（6）

る」(6)

- ・ドキュメンタリー制作のためのグループワーク：グループ作業を進めさせた。
- ・教員が各グループをまわって、作業の様子を確認し、適宜助言を与えた。
- ・授業の終盤に、作業の進捗状況について受講者全体に対して口頭報告させた。あわせて、作業途上での「行き詰まり」や問題点があれば、それを示して他グループの受講者にヒントやコメントを求めてもいい、と促した。
- ・期末レポートについて次のとおり作成要領を告知した(KULASにも掲出した)。

《期末レポート》次の(1)(2)についてレポートを作成し、提出する。

- (1) ①「ドキュメンタリー」制作作業の概要 ②そのなかで自分が果たした役割 ③グループワークに関する成果と反省(①～③をあわせて600～800字)
- (2) この授業でのとりくみ(CRリサーチ、ゲスト講師の講義、ドキュメンタリー制作)をとおして、「人間」「地域」「言葉」について学んだこと(成果)、考えたこと(考察)、今後の自分に活かせるであろうこと(課題と展望)についてまとめる(800～1000字)
- 体裁は、A4用紙を縦に置いて横書き、表紙は付けない、日本語の文章で論述(箇条書きは不可)、ワープロソフトを用いてよいが氏名は必ず手書き(署名)、とする。提出締切は8月5日(水)午後4時30分、提出場所は学生サービスセンター2階共通教育カウンター近くのレポート提出箱、とする。

第14回(7月22日)「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」(7)

- ・ドキュメンタリー制作のためのグループワーク：グループ作業を進めさせた。
- ・教員が各グループをまわって、作業の様子を確認し、適宜助言を与えた。

第15回(7月29日)「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」(8)

- ・完成番組(ラジオ・ドキュメンタリー)の公開、質疑、相互論評をおこなう。

(1) 完成番組を2回ずつ聴く。

(2) 受講者各人が他グループ作品(3つ)に対するコメントを紙に記し、それぞれ当該グループに渡す。

(3) 受講者各人に他グループ作品(3つ)のうち、もっとも良かった作品に投票させる。

投票をその場で教員が回収・集計し、票数を発表した。

- ・完成作品(音声データファイル)を学外から招聘したゲスト講師に送付した。先生方から返信された具体的なコメントをKULASに掲出した(掲出から期末レポートの締切まで5日ほどあったので、受講者はそれを参考にする事ができたはずである)。

《完成作品(4点)のテーマ》

- ①南溟寮の「雄叫び」
- ②卒業後の進路
- ③高知大生にきいた方言
- ④「高知家」オールスターズ

授業内容の逐次公開

人文学部オンライン学習支援システム(SOULS)の教員(川本)ページにつくった特設ページにこの授業の内容を紹介する記事を掲載し、毎回の授業後に更新した*。いわゆる「地域関連科目」として、高知のラジオ放送(NHK高知放送局/エフエム高知)に関する内容とゲスト講師をとりこむだけでなく、授業内容を発信することによって広義での「地域」「地元」とのつながりをこちらが意識し、受け手に意識してもらうことをも目指した。

*「ラジオについて考えよう/ラジオドキュメンタリーをつくろう」(2015年度授業)

アドレス：<http://souls.cc.kochi-u.ac.jp/?&rf=5140>

受講状況など受講者の様子

全15回の授業で、欠席1名、10分ほどの遅刻2名、体調不良による途中退出2名があった(同一学生による重複なし)。

授業時間の多くを占めたのがグループワークであったが、教員が適宜みてまわって声をかけるなどしたことや途中経過を口頭報告させたこともあってか、授業時間中にあからさまな「怠惰な取り組み」や「不適切な受講態度」が認められるようなことはなかった。また、受講者各人に提出させた2回のレポートにグループワークへの取り組み、役割、反省を書かせたことで、授業時間外の取り組みの状況や各人、各グループの状況も（あくまで各人の「自己申告」であることは差し引いたとしても）相当程度、把握できた。

授業前半の課題であった「C R局に関する調査・報告」では、全てのグループが調査要領に従った内容の報告をおこなったが、1つのグループが割り当て時間を大幅に超過した（10分間と指定したところを約20分かかった）。同グループは配布資料もハンドアウトとしての体裁を全く成していなかった（後述「今後のための検討事項と提言」も参照せよ）。

期末レポートを提出しなかった受講者が1名あったが、その他の受講者は2回のレポートを提出し、合格点を得た。評点は2名の教員（川本・西尾）がそれぞれに策定したものを平均した点とした。いずれのレポートにも積極的な取り組みが記されており、受講した意義と受講したことによる一定の成果は得られたものと考えられる。

授業運営体制

基本的には川本と西尾の共同作業によって授業を運営したが、授業の骨格、詳細とも川本が原案をつくり、西尾が確認・適宜修正したうえで進める形をとった。ただ、川本が時間の余裕をじゅうぶんにとらずに西尾に相談した事項があったり、実質的には西尾への相談無しに川本の原案のままで授業に臨んだりしたこともあった。

担当教員（川本・西尾）は現代日本の「ラジオ」「ドキュメンタリー」を直接の研究対象としていないため、ゲスト講師の招聘はきわめて大きな意味をもった。まずは地域関連科目であることを重視して、エフエム高知（松木亮氏）とNHK高知放送局（千野秀和氏）か

ら現職者（専門職）を招聘した。またドキュメンタリー制作にかかる専門的知見を得るためにこれまでに多くの優れたTVドキュメンタリー番組を制作してきた現役プロデューサー（山登義明氏）を招聘した。人選・依頼に際しては、地元の民間ラジオ局と日本最大のラジオ放送機関の地元局、アナウンサーとプロデューサーという対比関係も意識した。いずれの講師もたいへん積極的かつ熱心に授業にとりこんでくださった。松木氏は、事前アンケートをとって講義内容の組み立てに活用されつつ、地元民間FM局の業務全般をわかりやすく説明された。千野氏は講義担当の前週に授業見学にいられて受講者の様子などを確認し、当日は放送事業全体のなかでのラジオの位置づけや具体的な業務のありように至るまで丁寧に説明された。山登氏は、東京からはるばる来高され、担当時間いっぱい講義と直接かつ具体的な助言と指導をいただいたほか、授業後にもドキュメンタリー制作のための追加資料や学期末に完成したドキュメンタリー作品に対する厳しいコメントを下された。授業後に提出させた受講者（複数）の感想にも「山登先生の熱意」を深く感じ取ったことを記すものがみられた。

授業の成果

本授業については、前述のようなS O U L Sにつくった特設ページの冒頭で次のようにうたった。

「ラジオについて考える」「ラジオ・ドキュメンタリーをつくる」ためには、「人間」「地域」「言葉」に適確にアプローチしなければなりません。それはまさしく人間文化学科の3コース（人間基礎論、地域変動論、言語表象論）にある学問分野のキーとなる対象であり、このクラスが本学科の学生にとって重要であろう基本的な技法と知見を習得する機会になることを意味しています。

ここに掲げたコンセプトに沿った授業が完全な形で実現されたかどうか、にわかには判じたいが、受講者から提出された期末レポートを読むにつけ、クラス

全体としては所期の目的に合うレベルに到達できたのではないかと考える。

上述（「受講状況など受講者の様子」）のとおり、出席状況も含めて受講者の受講態度はかなり良好であった。授業冒頭の自己紹介で、大半の受講者が「ラジオはほとんど聴かない」と答えたことから、ラジオについてはコミュニティ・ラジオ（CR）は多くの学生にとって日常的な関心の外にある題材であった。そのわりにいわゆる「食いつき」が良かったことは担当教員として喜ぶべきことであろう。グループリサーチに際して調査対象CR局に直接コンタクトをとったり現地（サテライトスタジオ）に出かけたりしたグループが複数あった。報告内容にはそれなりに練られた切り口のアプローチが認められ、プレゼンテーションも一後述のような問題点もあったとはいえそれぞれに工夫されていた。授業後半に制作したドキュメンタリーについても、超一流のプロデューサーである山登氏からは厳しいコメントが寄せられたものの、限られた時間でそれなりに奮闘したあとが認められた。授業全体を通して言えば、受講者はこちらが想定した以上の積極性で課題や作業にとりくんだと言えるだろう。

学外から招聘したゲスト講師の講義についても、受講者の反応はとても良かった。どの講師の質疑応答でも教員が促すまでもなく質問の手が上がった。他大学で授業を担当した経験の豊富な山登氏が「これほど次々と手が上がる（＝質問が出る）授業はめずらしい」と驚いていたほどである。

「自ら課題を探究する」という点で、「ラジオ」ないし「ドキュメンタリー」という枠を設定したことの当否については議論の余地があるかもしれない。ただ、「課題探究実践セミナー」という授業をたしかに学問的な営為に結びつける手法のひとつとして考えれば、上に述べたような専門分野とのリンクを意識したコンセプトをふまえた「ラジオ」ないし「ドキュメンタリー」という枠は有効に機能したと言える。次項に述べるように検討や改善を要する事項はあるにせよ、総体的にみれば本授業は一定の成果をあげることができたものとする。

今後のための検討事項と提言

次年度以降に同じような主題により課題探究実践セミナーを開講するとしたら、次のような検討事項が考えられる。担当教員としての提言とあわせて以下に記す。

（１）受講定員と履修登録手続き

本授業に関する受講定員の設定と履修登録手続きにおける措置については本稿冒頭に示したとおりであるが、実際に授業を実施するなかで「グループ数は最大で4つ、授業実施に支障のない各グループの構成人数は4～6名だが、その最適人数は5名」であることを実感した。また、もとより担当教員（川本）は「希望者が定員を超えた場合、本来は受講意欲を確認するべくなんらかの選考を実施するのが望ましい」と考えている。学生間で受講に対する意欲の高低がある現実是否定できないなか、機械的な抽選である以上、「意欲の高い学生が落ちて、意欲の低い学生が履修する」という事態は起こりうる。一定の選考手続きをとることで「教員・学生双方にとっての不幸」を回避できるし、20数名という規模だけで考えるとそのような手続きも不可能ではあるまい。ただし、履修登録にかかる事務作業全体の仕組みや煩雑さを考えれば、そのような手続きをとることは実際には困難であろう。どのような方法が可能であるか、事務担当とも協議し検討することが望まれる。

（２）基本的な学問技法の指導

本授業で、担当教員がもっとも頭を悩ませ、もっとも議論を交わしたのは「ハンドアウト、レポート、プレゼンテーションの手法や技法について、どこまで具体的に指導するか」ということであった。それらはいずれも授業のなかで重要な位置を占めるが、他の初年次科目（たとえば「大学基礎論」）の内容と重複することやグループ作業（議論・コミュニケーション・協調作業）に要する時間のことを考えると、それらを微に入り細をうがち説明し指導することは難しい—あるいは本授業の本来的な目的・目標に照らしても適切ではない—だろう。されど本授業でおこなわれたプレゼンテーションの事例にみられるような事態を考えると、

これらの学問的技法について全く言及も指導もしないというわけにはいかない。限られた授業時間のなかでどこに力点を置いて指導内容を組み立てるか、さらに検討を重ねる必要がある。

（３）グループのパフォーマンスと個人のパフォーマンスにかかる評価

本授業では「ハンドアウト、レポート、プレゼンテーションの手法や技法」よりも「議論・コミュニケーション・協調作業」への取り組みに重点を置いたので、グループのパフォーマンスはそれぞれに対応する受講者各自のレポート内容とあわせて評価する形をとった。つまり、グループによるプレゼンテーションや制作ドキュメンタリーの出来不出来が個々の受講者の成績評価にストレートに反映される度合いはいくぶん低くなったといえる。そのような評価手法がはたして最善であるか、またグループ作業の諸局面を個々の受講者の評価にどう反映させていくかについては、今後も慎重に検討していかなければならない。

（４）学生による授業補助

本授業では、音声データ編集ソフトウェアの操作方法を説明する際に、担当教員（川本）が学生サークル「放送研究会 J A K K U」のメンバーに直接依頼し、ボランティアな賛同を得て、同サークルのメンバーである学部学生（本授業の受講者ではない）の助けを得た。初年次科目「課題探究実践セミナー」で学部学生のサポートを活用する（T A ないし S A にあたる）正規のシステムが存在しないため、このようなイレギュラーな形をとった。「課題探究実践セミナー」では、通り一遍な授業の枠を越えた工夫が他の科目以上に盛り込まれる可能性があり、多様な内容や形態の授業がおこなわれるケースも少なくないだろう。そのようなケースに適確に対応するためにも、学部学生が授業運営をサポートするシステム（S A など）の拡充が求められる。

（５）別時間帯の授業開講

本授業の第 8～10 回は、学外からゲスト講師を招聘する日程の関係で、やむなく通常の開講時間割（水曜 2 限）とは別の時間帯に開講せざるをえなかった。別時間帯（とくに平日）の開講は、学生の授業選択の幅

をせばめたり、他授業科目の履修に支障を生じさせたりすることがあるので、本来的には避けるべきである。ただ、授業内容に深く関わる高度な知見を得る機会をもうけるためなど、授業内容を充実させるためにやむなく別時間帯に授業を開講する場合もある。本授業では、シラバスに「授業期間中の水曜午後に特別授業をおこなうので公私とも時間を空けられるようにしておく」旨を明記して、受講者が履修登録前にそのことを認識するよう意を配った。通常の開講時間割の外で授業を実施するときに当該時間帯に重複する他授業の担当教員にあてて「受講者への特別な配慮」を求める事例があると仄聞するが、シラバスに明記することによって一少なくとも手続き上は一そのような不用意な要請や無用の混乱を避けることができる。受講生に授業内容と実施計画を正しく認識させる点からも、別時間帯の開講（あるいは開講後に日程調整する可能性があること）はシラバスで告知しておくようにすべきであろう。

むすびにかえて

ここで授業終了後の成果をひとつ付記したい。ゲスト講師である千野氏による講義に触発されて、本授業の受講者 3 名が地域の防災をテーマとするラジオドラマを制作し、(国立研究開発法人) 防災科学技術研究所が主催する「第 6 回防災コンテスト」に応募したのである。同コンテストは 2010 年から開催されているもので、千野氏によれば前回までのコンテストでは高知県からの応募がなかったため、同学生たちによる応募は高知県からの初参加ということになる。本授業が共通教育カリキュラムをこえて学生たちの自発的な活動につながったことは、担当教員としてもたいへん嬉しい。

本稿執筆時点で次年度の開講については未定であるが、本授業から得られた成果と課題は今後の課題探究実践セミナーの開講に際して活用できる要素を多く含んでいる。とりわけラジオという媒体は、インターネットや映像メディアが急速に発展・拡大している今日にあってこそ、むしろ注目されるメディアとも言える。東日本大震災後の災害対応ラジオ局による活動の

ことを考えても、それはあながち的外れではあるまい。
「学生の能動的・主体的な学習を促進・展開し、少人数
グループでの学習を取り入れて、課題探究能力や社会
性およびコミュニケーション能力を育成する」ⁱ授業と
してのみならず、人間文化学科（2016年度に新設され
る人文社会科学部にあっては人文科学コース）で主た
る研究対象たる「人間」「地域」「言葉」に批判的想像
力をもってアプローチする「入り口」としてもまた、
ラジオを題材とした本授業の取り組みを今後も深めて
いきたいと考える次第である。

《参考文献》（本授業の受講者にも紹介したもの）

山登義明『ドキュメンタリーを作る』京都大学学術出
版会、2006年。

長坂俊成／坪川博彰／李泰榮／須永洋平『地域発・防
災ラジオドラマづくり』NHK出版、2011年。

北郷裕美『コミュニティFMの可能性』青弓社、2015
年。

ラジオフォーラム／小出裕章『ラジオは真実を報道で
きるか』岩波書店、2015年。

ⁱ 高知大学教育改革実施検討本部『高知大学の学士課程教育改革
の基本方針』（平成22年3月）、20頁。